
失恋

紀本 真利亜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

失恋

【Nコード】

N4268D

【作者名】

紀本 真利亜

【あらすじ】

失恋の詩。きっと誰もが失恋を経験した事があると思います。そして誰もが失恋を乗り越えて優しい人になってきたのではないでしょう。失恋の一話完結の詩集です。

最後の電話（前書き）

最近、誰もが携帯電話を持っていると思います。とにかく便利ですよね？手紙なんかいらない位に。でも携帯では伝えきれない事、伝えてはいけない事もあると私は思います。

最後の電話

ねえ どうしてこんな大切なこと
携帯のメールなんかで伝えるの？

ズルイよ 携帯のメールからじゃ
卑怯な感じがするよ

気持ち伝わらないんだよ 私の心に
携帯のメールなんかじゃ

あなたの口から聞きたかったのに

だから

私はこのメールの返事はしないよ
私はあなたに会って 直接伝えたいから

携帯からあなたに電話をかけてしまう
「会って私に伝えて」って言うだけだったのに

電話のあなたは 困ってた
私は涙がでた 困ってるのは私なのに

涙声だからって なぐさめないで
優しくしないで 謝らないで

悲しいよりも 悔しい
最後くらい あなたの口から聞きたかったのに

どうして？

どうして 携帯のメールで終わろうとしたの？

私に会うのが面倒くさかったから？

新しい人と一緒にいたかったから？

それとも私に気を使ったつもりなの？

卑怯だよ そんなの

最後まで

あなたの姿 瞳に焼き付けたかったのに

あなたとの 最後の思い出が

携帯の電話になるなんて 切ないよ

涙が止まらないよ 私が悪かったのかな
あなたとの楽しい思い出が甦よみがえってしまう

夢ならいいのに

恋の終わりなんて こういうものなのかな

そっか

失恋しつれんしちゃったんだね

私

最後の電話（後書き）

こんな経験された方もいると思います。会え難いから電話で済ます。言葉では伝え難いからメールで伝える。会って話さなければいけない事もあると思うのですが。

年下の君（前書き）

こんな失恋もあると思います。今回は年上女性と年下男性の物語です。

年下の君

キミの最近の仕草と態度

私はキミとの恋が終わるのを感じた

年下のキミ

優柔不断で優しいキミ

嘘をつけないキミ

キミは若いからきつと新しい恋をしたいんだよね？
もつと色々な経験を積みたいんだよね？

でもキミから別れを切り出さない限り
私はキミの女なんだからね

だから私はキミに言うんだよ？

キスしてって

抱いてって

だって

私はキミの事が好きだから
キミを困らせてる訳じゃないよ

優柔不断なキミ

早く男らしい所みせて

フられるのを待ってるのは

正直キツイんだから

涙が出そうになるよ

でもキミの前では涙は流さない

優しいキミ

言わないのが優しさじゃないよ

時間が経てば経つほど

キミも辛くなるんだよ

私から言いそうになるよ

でもキミから言うまで私は言わない

嘘をつけないキミ

やっと真実を言うんだね

私は涙をこらえるよ

私はキミにフられたんだから

キミは新しい恋へ歩くんだね

私はキミを止める事は出来ない

だつて

私はキミの事が死ぬほど好きだから
好きな人の前では涙は見せないよ

涙こぼれちゃうとキミが困るから
優柔不断で優しいからさ キミは

早く行つてよ 涙がこぼれちゃうから
お願いだから もう一人にしてください

私は笑顔で元彼になつたキミを見送つた

好きなキミに嫌われなくなつたから

今でも大好きな年下のキミ
私と付き合つて少しは大人になつたの？

新しい人は困らせてはダメだよ
キミは優柔不断で優しいから

キミのいなくなつた部屋で一人
大粒の涙をこぼして泣いた

キミに聞こえないように

年下の君（後書き）

好きだからこそ笑顔で見送る事だっ
てあります。だって相手に気持ち
がなくなってしまうたら終わりな
のだから。どうせ終わるんだっ
たか笑顔でって、なりませんかね？

一目惚れ（前書き）

一目惚れをした女の子の話です。いつも使ってるバス停での話。

一目惚れ

いつも同じ時間に貴方はいる

いつものバス停に

私は貴方に一目惚れしてしまいました

毎日 貴方に逢えるのが嬉しくて心がときめく

貴方に気づいて欲しくて 私は色々してたんだよ

髪の毛イジッテみたり

いつもよりスカート短くしてみたり

目が良いのにメガネ掛けてみたり

お気に入りの香水をいつもより少し多くつけて貴方の近くに寄ったり

私には貴方に話しかける勇気が無かったから

いつもバス停には待ち人が数人

貴方は数人の中の私に気づいてくれた？

あの時間のバス停　いつも私の胸は

ドキドキ早鐘をうつていたんだよ

私の夢を見る時間帯

いつもの時間に貴方はいた

いつものバス停に

あなたが携帯で話してた　声が大きすぎだよ

内容からして彼女とのデートの約束をしてた

貴方には彼女がいたんだね　やっぱりいるよね

目頭が自然と熱くなり

いつもでない溜め息が一つでる

メガネが少し曇ってきたのではずし

気が付くとさっきまで貴方の近くにいた私は自然と距離を取っていた

私はいつも乗るバスに乗る事が出来なかった

いつものバス停には私ひとり

ひとすじの涙が右頬を伝った

今日も同じ時間に貴方はいるよね

いつものバス停に

私は貴方に逢うのがしばらく出来ない

だって 貴方に逢うと悲しくて心が痛むから

私はバスの時間を少し遅らせた 逢う勇気が無かったから

いつものバス停に私ひとり

私の片思いは終わりを告げる

いつもの時間に私がいなくなっても

貴方は気づいてないよね

一目惚れ（後書き）

なかなか巧くいかないから恋はドキドキするのではないのでしょうか。

赤裸々（前書き）

不倫をしてた女性の詩です。

赤裸々

毎晩のように

夢から覚めてしまう

あなたに抱かれてから

あの時の余韻よゐんに溺おぼれれてしまう

体が火照ほてり

息が荒くなる

もう一度抱いてと

何度も願ねがってしままう

月影つきかげが私の裸体を照らす

私は艶あでやかな女

あなたの為なら何でもできる

私は愚おろかな女

あなたに家族がいたとしても

私は強^{したた}かな女

あなたを略奪出来るのなら

早く抱きに来て

この体を弄^{もてあそ}んで

あなたの前なら私は只のメス

あなたを受け入れたいだけなの

早く快樂を与えて下さい

夢の中でもいいから

あなたという薬物の毒された

私は哀^{あわ}れな女

不^{ふじょう}理^りな幸せは続く筈も無く

あなたに捨てられた女

月影は赤裸々（せきらら）に私を照らす

私は悲しき女

毎夜あなたを思い出す

私は疚^{やま}しき女

毎夜あなたに恋焦^{こいし}がれる

私は恥^はずべき女

毎夜あなたを待っている

月よ

私は最初から叶わない恋と知っていた

星よ

私はいつまでこの苦しみを味わえばいい

雲よ

私の体に毒された「あなた」を消し去っておくれ

毎晩のように

夢から覚めてしまう

あなたに抱かれたから

あの時の余韻にまた溺れてしまう

月影は露に私を照らし続ける

夢の続きを見させてくれればいいのに

赤裸々（後書き）

読んで頂き有難うございました。感想書いて頂いたら何よりです。

桜散る（前書き）

少し前の話。忘れてはいけない時代。この時代があるから今の時代があるのです。

桜散る

今日があなたと一緒に過ごす最後の夜

明日の今頃はきっと・・・

今宵の夜は

ずっと二人で抱き合いました

ずっと二人で語り合いました

ずっと二人で涙を流しました

ずっと二人で朝を迎えましょう

お互い愛し合ってるのに

なぜ 永遠の別れが訪れなければならないの？

この二人の気持ちは誰に問えばいいのだろう

部屋から見えるのは庭にある桜の木

あなたが小さい頃から世話をした桜の木

やっと今日 花が咲いた

あなたが今日一日だけ帰ってくるのを祝うかのように

私はあなたに胸の中で泣く

あなたは私の肩を強く抱きしめ

あなたは涙を零す

初めて見るあなたの雫

最初で最後のあなたの泣き顔

夜桜が二人に覺られないように静かに風に揺れる

私とあなたは幼馴染

小さい頃からあなたが好きだった

あなたと一緒に過ごせて幸せでした

私を選んでくれて有難う

あなたは飛行機乗り

小さい頃から飛行機が好きだった

いつか二人で大空を飛ぼうと約束したよね

結局 約束は果たされないまま

出来る事なら私もあなたと最後を迎えたい

大切な時間ほど過ぎ去るのは早い

桜の花の隙間から朝日が差し込む

私達は静かに桜を見つめてた

ただ静かに

雀達が目覚め朝が来たのを私達に教える

来て欲しくなかった朝

あなたとの永遠の別れの朝

私の手料理をいつもより

ゆっくり一口一口味わう

最後の私の手料理

あなたにとって

この家も庭の桜の木も

そして今立っている玄関も

何もかも最後

そして私も・・・

今あなたは何を想っているの？

あなたは私に敬礼をする

そして私に背を向け男らしく歩みだす

少しずつ小さくなっていくあなたの背中

それが私が見た最後の姿

桜の木は寂しげに風に揺れあなたを見送る

どうして私とあなたはこの時代に生まれたのだろうか？

どうして私とあなたはこの時代に出会ったの？

どうしてあなたが犠牲にならないといけないの？

今宵の夜も夜桜が綺麗

昨日と違うのはあなたがいないだけ

ひとり夜桜を眺める

あなたは私を守るため大好きな大空を舞に行った

そしてこの時代の未来を変えるために

私はこの時代に生まれた事を恨んではない

あなたという大切な人に回り逢えたのだから

春風が庭を駆け巡る

私の髪をなびかせ 桜の花も揺れる

数枚の桜の花が庭に舞う

一つの花びらが私の膝にヒラヒラ舞い落ちる

私はその花びらを優しく掌に握りしめ胸にあてた

瞳を閉じ「おかえりなさい」と心の中で言った

少し遠い未来で

私はまたあなたと回り逢えたい

きっと大丈夫

その時代は今より平和だから

だってあなたが未来を変えるため

空へ羽ばたいたんだから

その時はまた私を愛してください

桜散る（後書き）

若き特攻隊員のお嫁さんの詩です。今の若者は誰かの為に（命までとは言わないが）何かをしてあげる事が出来るのでしょうか？きつと難しい事と思います。もっと文章が巧く書けたら良かったのですが読み手に私の伝えたい想いが伝われば嬉しいです。

日記（前書き）

浮気がばれた男の詩です。失ってから気づく事有りますよね。

日記

ずっとキミと一緒に住んでいたこの部屋

キミとの思い出しか見当たらない

二人で選んだ小さなお城

ずっとキミと暮らせていけると思っていたんだ

なのに気がつけばこの部屋に

僕一人

この部屋の全ては二人で見つけたもの

淡いピンクのマグカップ

色違いの赤と青のハブラシ

おそろいのパジャマ

少し大きな鏡

一つ一つに刻まれた二人の時間

キミは僕に尽くしてくれた

キミがいつも綺麗にしてた台所

僕のために買え置きしてくれたタバコ

キミがたたんでくれた僕の服

一つ一つに触れたキミの温もり

部屋から失ってしまったのは

キミというかけがえのない存在だけ

悪いのは僕

キミを裏切ってしまったから

失ってから気づいた愚かな僕

キミがどれだけ大切な人だったのかを

小さなテーブルに置かれた一冊の本

キミが毎日記していた赤い日記帳

決して僕にはみせてくれなかった

キミの心の言葉

僕の手は自然に赤い日記を手に取り

キミの心の中を覗いてしまう

そこに記されていたのは過去の思い出

僕の記憶が鮮明に甦る

一緒に過ごしたその日その日を

二人の出会いに始まり

キミに告白した事

初めてキミを抱いた日の事

キミと喧嘩した事

キミと僕の誕生日にあった事

二人で部屋を探した事

家具を選んだ事

旅行に行った事

街に買い物に行った事

キミの思い出は丁寧な字で書かれていた

時々可愛い絵も添えて

でも1ページだけ丁寧な文字が滲んでいた

ただ1ページだけ

僕が過ちを犯した日の事

きつと泣きながら書いたそのページ

痛いほど伝わる君の辛い気持ち

どんな思いで書いたのか

それがこの赤い日記帳の最後のページ

残りの白紙のページはまだあるのに

二人の思い出を途中で終わらせてしまった僕

僕が過ちを犯さなかったら

まだまだキミは続きを書く事が出来たのに

情けないほど小さな自分に気づく

僕は頬を伝う涙にも気づかず

キミの思い出が記された赤い日記を

胸に抱きしめてた

二度と戻る事の無い

大切な月日と最愛のキミ

僕は日記に願う

「時間よ戻ってください」と

叶わない事と知って

日記（後書き）

乙女心は海より深く空より広いのです。軽率な行動は控えましょう。

赤い日記帳（前書き）

浮気された女の詩。「日記」の女の視点から書いてみました。

赤い日記帳

ずっと過ごしていたこの部屋

あなたとの思い出しか

残っていない

でもこの部屋にはもういられない私

部屋の真ん中にある小さなテーブルから

私は部屋全体を見渡す

目に入ってくるのは

良く使っていた少し大きな鏡

良く料理を作っていた小さな台所

一緒に笑いながら見ていた小さなテレビ

一緒に寝ていたシングルベット

どれも今の私には悲しすぎる楽しかった思い出

この部屋の全てにあなたと私の思い出が溢れている

幸せだった日に浸ってしまい

自然と私は思い出し笑いなんかをしてしまう

カバンから日頃から書いていた

赤い日記帳を取り出す

最後に記そうと思ったから

赤い表紙をめくると

あなたとの出会った日の日記から始まる

あなたの第一印象の事が記してあった

初々しい今より少し若い時の私の気持ち

1ページ1ページゆっくりと

当手を振り返る

めくる度に胸に込み上げてくる

切ない気持ち

めくる度に瞳から涙が零れる

そして私の楽しかった思い出は終わりのページへ

私は涙と鼻水を手でぬぐい

最後の日記を書く

手が震えていつもの字では書けない

とてもへたくそな字

涙でインクが滲んでしまう

鼻で泣きながら今の気持ちを記す

なぜあなたは私を裏切ったの？

私の事が嫌いになった？私の思いが重かった？

私はあなたと一緒にずっといたいよ

だってあなたの事が好きだから

今でも好きだよ

でもあなたを許す事がどうしても

できない私がいるの

こんな曖昧な気持ちであなたと一緒に

いることは出来ないから

ごめんね

あなたが悪いのにどうして私が誤るんだろう

でもごめんね

あなたを許す事が出来なくて

子供の私を許してね

大人になれない私を許してね

楽しかった日々をありがとう

そして

さようなら

まだ白紙のページが残る日記帳を閉じ

テーブルの真ん中に置いた

涙は止まらない

好きなのにあなたから離れることを

選んだ小さな私

あなたを許せばこれからもここにいれるのに

そうしたらいつもの明日を迎えられるのに

昨日買っておいたあなたがいつも吸っている

タバコの箱を赤い日記帳の横に置いた

日記は私には辛い荷物だから

この思い出の詰まった部屋に

一緒に置いていく

この部屋から

私だけ出て行く

合鍵はポストに入れて

赤い日記帳（後書き）

どうしても許すことの出来ない女の心境。乙女心は海よりも深いのです。

白い天使達（前書き）

今更ですがクリスマスの失恋の詩になります。

白い天使達

今日は聖なる日

クリスマス

周りはカップルだらけ

なのに僕は一人で歩いてる

本当はキミと歩いてた筈なのに

僕はさつき彼女にフラれた

わざわざクリスマスにフル事もないのに

なにが好きな人が出来ただ

前から好きなヤツがいたなら

クリスマスが来る前にフレよな

今宵は聖なる夜

クリスマス

周りは幸せ溢れる人だらけ

僕は未だ一人で歩いている

今頃キミは違う人と歩いてるの？

漆黒の空からは雪が降ってくる

わざわざこんな日に降る事もないのに

今年に限ってホワイトクリスマス

周りのカップルが羨ましい

どうせなら一年前のこの日に降れよ

この雪が雨なら

僕の涙はごまかせるのに

この雪が雨なら

今の僕に丁度良かったのに

キミへのクリスマスプレゼント

渡しそびれちゃった

いつその事渡せば良かった

今となつてはあつても仕方のないものだから

キミの欲しがつてた香水

淡い香りなど今の僕には必要ないから

甘い香りなど今の僕には似合わないから

聖夜は綺麗に雪が舞う

ホワイトクリスマス

幸せな人達を祝うように

白い小さな天使達は

暗い空から次々と舞い降りる

それはとても綺麗で美しい

数年に一度の空からの

クリスマスプレゼント

僕は一人雪が降る夜空を見上げた

キミもきつとこの夜空を見ているの？

僕の顔に雪が落ちる

なんで僕だけが一人？

空から舞落ちてくる

小さな天使達

僕の顔にも落ちてくる

その天使はすぐに雫となり

僕の涙と一緒に頬を伝う

それはとても冷く

今の僕には

とてもお似合いなのかもしれない

白い天使達（後書き）

クリスマスの日は全ての人が上手くいってるとは限りません。

失恋（前書き）

こんな失恋があっても良いのかも。私の理想の失恋です。最終話「失恋」です。

失恋

あなたに出会った私

初対面の印象はちよつと変な人？

でも段々と会うたびに気になってしまう

不思議なあなた

私の心はいつの間にかいつもあなたがいた

気がついたらあなたの事を好きになっていた

変な人から恋しい人へ

私の思いは変わりました

あなたも私の事が好きだったみたい

一緒にいてわかってしまった

だってあなたは見ててすぐわかるんだもん

あなたの考えてる事がね

自然と二人の距離は近づいていったね

今は友達以上？恋人未満？

私は完全にあなたの事が好きだよ

あなたは私に告白をしてくれた

本当は凄く嬉しかったのに

意地悪な私は少し考えるフリをする

そして

「いいよ」って言ってあげた

あなたの嬉しそうな顔

これからも大切にしたいな

恋人未満から恋人へ
やっと発展できたんだね

私はあなたといれて
本当に幸せを感じています
毎日が楽しくて嬉しくて
でもフト思ってしまうことがある
この恋はいつか終わってしまうのかなって
あなたはそんな事考えないのかな？
あなたはどう思っているのだろう？

お互いの性格も
良いところも悪い所も
わかってきたね
喧嘩もしたし
旅行もしたね
そして同棲も出来たね
いつも一緒だったよね

恋から恋愛へ成長しました
やったね私達

あなたと出会って月日が経ちました
まだこの恋愛は続いています
終わりは来るのかな？
このまま続けば良いのになあ
この先はどうなるのだろう？

ある日あなたは私を呼び出す
私はすこし嫌な予感

もしかして？って思う
フラれちゃうのかなって
それとも？いよいよ？
期待感もあつたんだよ

あなたは私にプロポーズしてくれた
私は嬉しくて涙を流してしまう
本当に嬉しい言葉は私の心に響く
この涙は私の気持ちが入っている
だって私の心の中では満ちすぎて
涙となって溢れてしまったモノだから
私は頷く事しか出来なかったよ

やっと恋愛から愛に昇格
恋を失う事が出来ました

これも言わば失恋なのかな？
失恋だよ
この上の無い嬉しい失恋
この愛はずっと続くんだよ
だってお互いが愛し合っているのだから

最愛のあなたへ
恋を取ってくれてありがとうね
これからもずっとずっと
私のそばにいてください

失恋（後書き）

最後まで読んでくれて有難う御座います。失恋は文字通り恋を失う事です。ほとんどの方が悲しい思いをしていると思います。悲しい辛い事を経験する事で次の恋には生きてくるのではないかと私は思います。そしていつか愛に変わる失恋をして欲しいと思います。

2008/2/15 紀本真利亜

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4268d/>

失恋

2010年10月9日11時29分発行